

乳 幼 児 看 護 学

新連載



は じ め の 一 歩



第1回

乳幼児看護学とは

廣瀬たい子 Hirose Taiko

東京医科歯科大学大学院保健衛生学研究所小児・家族発達看護学教授

~~~~~ 連載にあたって ~~~~~

乳幼児看護学という聞き慣れないことばには、あまり新規性も、含蓄性も感じられないかもしれない。しかし、「どんなことを学ぶ領域なのだろう」という単純な好奇心をもってもらうには、平易で想像しやすいことばであろうと思う。

筆者は、1973年に看護学校を卒業してから、看護師として小児看護臨床で10年、大学の小児看護学教員として24年間勤めてきた。その間、大学院生として勉強に専念する期間もあった。あと1年で定年退職を迎えるにあたり、自分がこれまでに学んだこと、実践したこと、研究したことを振り返って、小児看護学分野を拡大する必要性を感じている。乳幼児看護学は小児看護学のどこかに位置するものの、多くの看護師・看護学教員に意識されることが少なく、認知されることも少ない領域かもしれないが、人生のはじまりの大事な時期をもっと深く、かつ広範に理解するために、乳幼児期に特化した看護学の必要性を強く感じている。

本連載が、乳幼児看護学の第一歩になることを妄想している。

看護学の多様化

看護学において、筆者が看護学校で学んでいたころには存在しなかった、新しい分野・領域が増えている。すでに「新しい」ということばを用いることが適切でない分野・領域も含むが、老人看護学、家族看護学、在宅看護学、災害看護学、国際看護学など。さらに成人看護学の細分化もはかられ、急性期看護、周手術期看護、慢性期看護、救急看護、がん看護、緩和・ターミナル期看護などの広がりをみせている。

一方で、小児看護学の領域では、細分化や専門分野の区分化はあまり進んでいないようにみえる。日本の小児人口が減少の一途をたどるなか、無理からぬこととはいえ、小児を一人の人間としてみたとき、あらゆる要素を

包含しているだけでなく、小児期の発達は著しく、日々刻々と大きな変化を遂げている多様性に富んだ時期である。また、独力で生存不可能であるため、大人からの保護・養護なしに成長・発達することができない存在であることから、親・養育者・家族を中心とした多くの人を看護の対象に含むことを必須とする。さらに、成長・発達の時期のみでなく、成長後の健康・病気・生活を視野においた看護を考えなければならない、きわめて広く、かつ深い看護学である。小児看護学という単一の分野からはみ出さざるを得ない分野・領域、あるいは、小児看護学という分野を大きく拡大する必要性を考えるゆえんである。

乳幼児理解の進歩

筆者は、臨床看護、看護教育・研究においても、主に0～3歳までの乳幼児期を専門としてきた。新生児室、NICU、乳児院、乳児病棟で臨床看護師を務め、大学院では新生児や乳幼児を対象とした研究に取り組み、大学教員となつてからも、乳幼児の看護をテーマとした研究に取り組んできた。乳幼児はこちらの意図に応じたコミュニケーションができるわけではない。そのため、主として、乳幼児の母親、父親、家族との対話をとおした手がかりと、乳幼児の感情や行動を読むことで看護を提供したり、研究したりしてきた。今思い起こしてみると、ずいぶん自分勝手に、自分の都合を優先させてきたようで心が痛む思い出が多い。

看護の対象としての乳幼児のとらえ方を大きく変えてくれたのは、1974(昭和49)年から夜間部の大学で、乳幼児の発達と Bowlby のアタッチメント理論を学んだときであった。そのころは、日本のNICUの草分けであった病院で看護師をしていた。毎日、命のかすかなともし火を絶やさないうえ、精一杯の看護に追われていた。早産児の心や家族の思いに目を向けるゆとりがあつたとはいえない。しかし、Bowlby を学び、アタッチメントの大切さを学ぶことをとおして、親子、特に母子の関係性の重要性に気づかされた。当時は、欧米で乳児研究が爆発的に進歩し、その成果の多くが日本にも紹介されていた。1979(昭和54)年からは、大学院で児童学を学び、乳幼児研究論文を英語で読みはじめた。当時は、無能な存在としての乳児の能力が次々と明らかにされ、能動的で有能な乳児の知覚能力、認知能力、行動が研究対象とされ、研究成果が報告されていた。それらを学ぶことで、看護の対象としての乳幼児や母親の見方が変わり、もっと知りたい、学びたいと思った。しかし、そのときの知識も学びも不十分であった。

小児看護学と乳幼児研究

その後1991年に学位を取得するためにアメリカの大学に留学し、乳幼児の行動観察に基づく看護研究を行い、英語との格闘の毎日ではあつたが、看護研究の面白さを知った。また、乳幼児と母親の関係性に着目した研究の

多くにふれることもできた。しかし、当時、脳科学の視点からの乳幼児研究や親子関係研究を見聞きすることはほぼなく、多くは行動科学に基づく研究であつた。帰国後も乳幼児と養育者の相互作用を行動科学に基づいて観察する手法を、日本の小児看護学に導入する研究を、若い小児看護学教育・研究者と共に行つた。

その研究活動をとおして世に出すことができたのが Nursing Child Assessment Satellite Training (NCAST) 日本語版であつた。これは、乳幼児と養育者の相互作用の行動観察をとおして、両者の相互作用の質を測定するアセスメント尺度である。NCAST 尺度の普及活動は現在も継続しているが、この尺度を用いる研究活動は、乳幼児精神保健との出会いをもたらした。

乳幼児精神保健

留学から帰国後の1996年に、フィンランドのタンペレ大学で世界乳幼児精神保健学会が開催され、留学時の恩師であつた Kathryn Barnard 先生のお誘いがあり、留学時の研究成果を発表するためにタンペレに行った。その学会では、乳幼児精神保健に関する多くの講演や発表があり、日本の乳幼児精神保健の草分け的存在である渡辺久子先生が、Barnard 先生と共にシンポジストを務め、日本の親子関係の特徴と問題について発言されていた。また、2012(平成24)年に横浜で開催された世界乳幼児精神保健学会では渡辺久子先生が会長を務め、筆者も役員としてかかわる機会をとおして、乳幼児精神保健の重要性を認識した。また、自分がこれまで行ってきた看護や、学んできたことすべてが乳幼児精神保健につながることを理解した。

乳幼児精神保健とは、1970年代にアメリカのソーシャルワーカーであり精神分析家であつた Selma Fraiberg とその同僚が開発・発展させた支援方法であり¹⁾、広義には、乳幼児の健康な社会的・情緒的発達と同義語であるとされている。Fraiberg は、乳幼児が安定した親子関係のなかで発達と健康を育むことができるような支援方法を考え出し、それを「乳幼児精神保健」と呼んだという。“infant”は3歳以下の子ども、“mental”は社会・情緒・認知領域をさし、“health”は乳幼児とその家族の健康を意味したとされる²⁾。小児看護学におい

て、この乳幼児精神保健の知識と理解は必須・不可欠であり、特に乳幼児期の看護を実践するためには重要であることを、小児看護実践にかかわってから25年、小児看護教育・研究にかかわってから15年を経て認識した。そして、もしもっと早い時期に乳幼児精神保健を学んでいたなら、これまでににかかわってきた乳幼児や家族に対して、もっと心ある看護を提供できたのではないかと、また、小児看護学の教育においても、もっと重要なメッセージを学生に伝えられていたのではないかと考えている。

乳幼児看護学を創る

乳幼児精神保健は、乳幼児と養育者との関係性に着目し、乳幼児と養育者の関係性が健康で、あたたかく、安定した、愛情に満ちたものであることが、乳幼児の豊かな社会性・情緒の発達をもたらす、ひいては知的学習を促進し、対人関係を豊かにし、幸せな人生に導くと考えている。こうした豊かな関係性が乳幼児に提供されることのない養育環境のなかで育つと、乳幼児の認知的・社会的・情緒発達が遅れ、阻害され、ゆがめられ、時に自身を傷つけ、自己破壊をまねき、時に反社会的な行動をとおして他者を傷つけ、破滅の人生に至る。かなり短絡的な説明をしてしまったが、このような成長・発達路程を信じ、最悪の路程を乳幼児期に予防する、もしくは治

療するための看護の重要性を信じている。それは、乳幼児が健康であるか、病気であるか、障がいをもつか否かを問わない。

乳幼児精神保健を基盤として、乳幼児とその家族の看護を実践、教育、研究することは、小児看護学の基礎であり、その基礎分野をもっと深く理解し、学ぶための乳幼児看護学を創ることは、私たちの生活や人生を豊かにすることにつながる。すでに、医学、心理学、保育学などの領域で乳幼児期を対象とした学問や実践が十分普及している。しかし、看護学において、看護実践において、「しるべ」となるべき知識や理解、経験を統合し、看護職の拠り所となる学問・実践分野が必要である。それを、本連載をとおして示していただけることを願っている。

本連載では、単に精神保健にのみ着眼した実践ではなく、疾患や障がいをもった乳幼児や家族の看護の事例を示し、乳幼児精神保健を基盤とした看護の実践と理論を論述したいと考えている。本連載が、小児看護学に新たに乳幼児看護学の分野を誘う第一歩となることを期待する。

【文 献】

- 1) Shirilla JJ, Weatherston D・編(廣瀬たい子・監訳)：乳幼児精神保健ケースブック；フライバーグの育児支援治療プログラム。金剛出版、東京、2007、pp 19-31。
- 2) 廣瀬たい子・編著：序章。看護のための乳幼児精神保健入門、金剛出版、東京、2008。

ファミリーパートナーシップ モデル(FPM)による育児支援講習会

■概要・内容：

ファミリーパートナーシップ モデルとはさまざまな問題をもつ家族の支援の基礎となるものです。乳幼児の発達を促進し、より健康な生活ができるように、予防的な家族支援を提供したり、虐待・ネグレクトの予防支援のために用いることができる育児支援モデルです。発達科学と研究成果に基づいて作られ、効果も証明・報告されています。講義形式ではなく、受講者間の討論や模擬演習をとおして学びます。

■ファシリテーター：

三国久美(北海道医療大学看護福祉学部小児看護学教授)
草薙美穂(天使大学看護栄養学部准教授)
澤田優美(天使大学看護栄養学部講師)

■対 象：

2カ月前後の乳児と家族に対して、病院、保健センター、保

所、児童相談所、家庭訪問などで支援を提供している看護職(保・助・看)、保育士などの方々。なお、全日(1日ずつ2回)の参加可能であることが必須です。先着15名までとします。

■日 時：2015年7月25日(土)・8月29日(土) 9：00～17：00

■会 場：札幌市内の大学施設 ■参加費：無料

■申し込み方法：

E-mail：sukusuku.cfn@tmd.ac.jp FAX：03-5803-5342

■問い合わせ：

国立大学法人 東京医科歯科大学(TMDU)
大学院保健衛生学研究科 小児・家族発達看護学研究室
教授 廣瀬たい子(代：永吉美智枝)
〒113-8519 東京都文京区湯島1-5-45
TEL：03-5803-0159 E-mail：jncast.ns@tmd.ac.jp
URL：http://jncast.cf-n.org/